

2016年3月29日付エル・ペリオディコ紙

ロベルト・ワグナー氏コラム

「共に！ラテンアメリカ・カリブ地域における生まれ変わった日本」



ロベルト・ワグナー氏

日本は世界経済三大国のひとつである。

国際関係における現代理論の父と呼ばれるケネス・ウォルツは（以前）「自然が真空を嫌う様に国際政治も不均等を嫌う」と述べた。我々は（現在）極東におけるパワーバランスを巡る地政学的緊張の証人である。危険な北朝鮮と中国の覇権主義により日本が経済面のみではなく、軍事的にも生まれ変わった姿を現している。事実、日本はラテンアメリカ・カリブ地域と初めての大きな賭けに打って出た。

日本の安倍総理大臣は2014年8月にブラジルのサンパウロにおいて日本とラテンアメリカ・カリブ地域の関係深化の必要性を強調した。同首相は両地域間協力における新たな段階を反映する「3つの指導理念」を挙げた。即ち発展を共に、主導力を共に、また、啓発を共にである。安倍首相のスピーチは「共に！」をモットーにした学術及び専門家交流の始まりとなった。

私は新しい日本を訪問し、体験することにより二つの大きな教訓を得た。一つは明治維新以降軍拡、2度の原爆投下及び東京大空襲を経験した後の敗戦といった歴史的記憶を覆い隠すことのなかった国の復興である。敗戦にも拘わらず70年以上経った現在、日本は社会経済指標からも明らかな通り世界三大経済大国の一角を占める。

もう一つの教訓は持続可能な開発の推進が不可欠であるということだ。中国のケースからも明らかな様に国民に更なる負担を与える様な経済成長は殆ど意味を成さない。経済においても地方分権の達成及び環境に配慮した政策に重点を置くことがバランスの取れた経済成長と開発の実現に繋がるであろう。

（日本について）記述すべきことはまだまだ沢山あるものの、上記二点を特に強調したい。つまり太平洋の向こう側には我々が学ぶべき代替案が存在するという事だ。現在、日本は共に発展し、主導し、啓発するという希望を持ちつつ我々に手を差し伸べている。